

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと風

第205号（2024年4月）春号

春は足踏みか？ 桜は戸惑っている？

この冬は暖かく桜の開花も例年より早いといわれて桜祭りも早く計画されたのに三月下旬は寒い日が続いて春の気配も遠のいてしまった。四月になって漸く桜の開花も各地で聞こえてきたと思っただけなのに満開になったとの便りも聞こえて来た。どうも四季がちゃんと巡ってこないかと桜も、今が春なのかもわからず戸惑っているように思えてしまう。この風の会も2006年からであるのもうすぐ満十八年を迎えるが、今年の春はなかなか春らしくない春である。

常世の風に吹かれて呟いて（10） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2015年）の記事から

一部を抜粋して連載します。）

・蒲公英 桜に負けず満面の笑み

不快な陽気の日だった。雨は降るでもなく降って、風は強く、気温も湿度も高い。夕食後、突然血糖値が下がりがだし、慌てて値を測定すると28と表示される。ブドウ糖を水に溶かして摂取。暫くジツとしていると正常値に戻って来た。ヤレヤレである。

今日のような陽気は、要注意である。馬滝で最初に倒れたのも、大震災の前に二度目に

倒れたのも今日のような不快な陽気の日であった。低血糖で倒れて、そのまま召されるのであればこんな良い往生はないと思うが、なかなかそう上手く行くものではない。

不快な気分の日であったが、庭の隅の蒲公英が澱んだ陽気に逆らって、明るく満面の笑みを見せてくれた。桜の花の満開よりも、隅に咲く蒲公英の花の方が心に沁みてくるのは、身内鼻唄と言うやつなのだろうか。しかし、黄色く輝く三輪の笑みは小生の心を和ませてくれた。



（絵：兼平智恵子）

春つらら 蜥蜴と日向ぼっこする

久しぶりの快晴。

陽だまりに椅子を運び日向ぼっこしていたら、小さなヘビがやって来た。へびって今頃子供が生まれるのだったかな、と不思議に思っていたら何とトカゲが三匹縦に連なってやって来るのだった。眼鏡をかけていない裸眼にはヘビの子に見えてしまったのだった。それにしてもトカゲが三匹紐のように連なって日向にやって来るなんて初めての

## ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

体験。小生を恐れるでなく、足元をそれこそへびのように一本になって過ぎて行った。見事な集団行動の行進であった。午後になって強風が吹きだし、折角の陽だまりには誰も来なくなってしまう。躑躅の枝にカマキリの巣があるのだが、まだ子供は孵らない。単に群がってウジャウジャ小カマキリが蠢いているのを早く見たいものだ。気持ち悪がる人も居るようだが、ウジャウジャ集まっているのは自然の命が感じられる。今日は暖かかったので梅の子がまた一回りほっこりと膨らんでいた。明日また暖かくなると、植えたトウモロコシやオクラの種が、土の中でモゾモゾ始める事であろう。トマト畑の準備は出来た。来週、買に行こう。

常陸娘子と竹波命婦 兼平智恵子

大化改新(西暦六四五)後、常陸国は、茨城国、筑波国、新治国、那珂国、久自国、高国の六国が、そのまま郡(こおり)となり、大化二年から白雉(はくち)年間(六五〇〜六五四)にかけて、香島、行方、信太の各郡が新設され、さらに白壁、河内の二郡を加えて十一郡となりました。

その当時日本全国に六〇余りの国々が誕生し、国ごとに国府(役所、現在の県庁に相当)が置かれました。現在の茨城県ほとんどが常陸国として、誕生し、政治・経済・文化の中心地である国府が茨城郡の石岡に置かれ、行政機関常陸国庁(建物群)跡が市立石岡小学校校庭下から多数発見され、この建物跡は校庭の地下で大切に保存されています。



校庭の脇には「……東女を忘れたまふな」の歌碑。

国を統治する長官は国司と言われ都から赴任された。養老3年(719)7月から6年までの3年間の執務を全うし、帰任することになった藤原宇合

(うまかい・鎌足の孫)の歓送の宴にお仕えした女性のひとり、歌の作者、常陸娘子(ひたちのをどめ)であった。

「庭で育てた 麻を刈ったり 干したり、布にしたりするあづまをみなを お忘れくださいますな」

藤原宇合大夫 遷任して京に上る時 常陸娘子の贈る歌一首  
府中城跡の土塁を背に控えめに佇んでいます



続いて同じ時代に生きた

竹波命婦(つくばのみようぶ・常陸国筑波郡出身)の采女(うねめ・古代、天皇の食事などに奉仕した後宮の女官)についてご紹介します。

昭和三六年一月二四日平城宮跡大膳職推定地のゴミ穴から発見された「寺請木簡」が平城一号木簡と呼ばれ、二〇〇三年には木簡として最初の重要文財に指定されました。



(表) 寺請 小豆一斗 醬一十五升  
大床所酢末醬  
(裏) 右四種物竹波命婦御所 三月六日

寺は法華寺、平城宮内の役所に対し、小豆・醬・酢・末醬の四種類の食材を請求する木簡で常陸国出身の竹波命婦が見えます、孝謙天皇のお気に入り、の側近女官だったそうである。

この木簡が描く状況は、奈良時代最大の事件ともいえる藤原仲麻呂の乱、直前の事態にぴたりと合、政変があるうと役人たちは木簡を使って、日々の仕事を実直にこなしていた。それが、奈良の都を支えていたと言う。奈良の都で常陸国の女官が側近として大活躍(正五位下まで上がった)していたのである。

常陸娘子と竹波命婦とはその当時としては身分こそ違っていたかもしれませんが同じ常陸国の東女としての気品と強さに誇りを感じるのでした。

参考資料 石岡市史

天平びとの声をきく

○日に追われ 老いに追われ 楽を追う

智恵子



## 我が人生の回想16

木下明男

### ギター文化館誕生まで・・・⑤

ギター文化館誕生のきっかけ(理由)の話・・・別角度から？

ここ十数年、久し振りに聞く仲間や先輩たち、更に恩師(生きる上での指針、お世話になった方)の便りは訃報ばかり・・・？残念な事であるけど、古希を超えた身には当然のことなのだろう。私が労音運動に参加して、数年経ち東京の中心活動家として認知され始めた頃、突然に登場してきた大

学教授！この人物像は、豪放磊落なI先生・・・東京にある経済大学の数学科の教授。私より20歳ほど上か？ 東京労音とは創立当初より関りがあり、総会等の議長を務めてきたらしい。全国税労組の委員長を務め、ある事件の責任を取り解雇された歴任があるとか。 内部事情諸々のことで纏まる必要がある時期に、東京の委員長全国の議長として迎えたようです。其のI委員長に、純朴な労働者として認められ東京労音の副委員長の任に就くことになった・・・50年も昔のことです。

I氏と共に全国税労組の相棒S氏(東京税理士会の副会長)が、税務会計の顧問としてコンビを組んでいた。同じく仲間のK弁護士の協力も経て、税金滞納事件(入場税不払い)が、国税局と和解(本税のみ3億を納入)をして、信濃町にある事務所のあった土地を沖縄県に売却して国に納入をした。税金問題が解決した事で、その時点で本部のあった水道橋の全国労音会館は、労音の大きな財産として存立することになる。

労働者のための文化組織(音楽鑑賞団体)は、

社会の発展と共に一般市民の音楽に対する選択肢が広がるとともに、経済団体や宗教団体が同じような鑑賞組織をつくり(労音攻撃)労働者の自律的音楽要求に大きく食い込み、労音会員は大きく減少した。組織の存続のために大きな改革が必要になり、組織内の配置転換(労音本来の事業と営業事業)と事務局員の転職を図った。それでも減少は止まらず、地域の諸組織と結びついた(職場、地域、学園、地域団体)活動を展開させ、文化要求を細やかに拾い上げる。組織のスリム政策を展開し、東京を幾つかに分け(ブロック化)それぞれに地域労音を作る方針を立てる。

1970年に建設した本部会館(全国労音会館)も老朽化し維持に資金を要するため、地域労音化するためにも、本部会館の売却をすることにした。其処でまたI会長の仲間である、O氏が経営する東部系列の会社に売却を打診する。バブルの時期でもあり、その価格は坪当たり3000万(240坪)で72億円になるとの事。そして、税理士の調査で任意団体が組織の基本財産の移動には無税であることが判明？ 大きな資金を得ることになる。この資金をブロック化の拠点(地域事務局)作りに当て(得た資金の半分) 残りの資金を貯蓄し、その利子で(此の頃は5%)運動に充当する。資金は何れなくなるので、その資金を公的に守るため財団方針化を図ろうとするが、国も地方も取得が難しく(労音の組織としては)他の団体を作り労音が管理をする。その一環が、M・カーノ記念団体(ICG)で、そのセンターとしてギター文化館が計画されたのです。(つづく)

## 地域に眠る埋もれた歴史(93)

木村進

### 【まほらの里】(1)

ブログ(まほらにふく風に乗って)を長年書いて来ますが、その中の昔書いた記事からいくつか興味深いと思われるものを何回かに分けて抜粋して取り上げてみたいと思います。

### 天狗の話(1)

猿田彦

#### ・猿田彦

天狗の姿の原型と言われている「猿田彦」のお話です。猿田彦は日本書紀などの神話に出てくる神様で、神が高天原に降り立つ時に、下りる場所から葦原中国(あしはらのなかつくに)までの道案内の神として登場します。

神が降りたのは宮崎県高千穂、そして葦原中国は出雲あたりを指すと思われていますが、神話ですから諸説あり、神の国から日本の本土への道案内との解釈もあるようです。

天狗の話ですから、この神話はさておいて、猿田彦の姿が、天狗そっくりなのです。



右上の写真は石岡のお祭りの祭礼に出てくる行列

の先頭に行く猿田彦です。まさに天狗ですね。もつとも、お祭りの時はこの前に「富田のささら」という変わった三匹の獅子が露払いをします。

右下の写真は「染谷十二座神楽」に登場する猿田彦です。これも神楽の最初に登場します。

神話に出てくる猿田彦は「鼻長は七咫、背長は七尺、目が八咫鏡のようだ」とあります。

「咫(あた)」は長さの単位で、直径1尺の円周の長さを4咫としたという。1咫は0.8尺という。中国後漢時代の1尺は約23cmほどだというので、背の高さは約161cm、鼻長は129cmとばかに鼻が長い。もつとも長いことを誇張したものと思われるし、目にいたっては八咫鏡というので直径が50cm近い円になってしまふ。

もつともこの八咫というのは単に大きいというように使われているそうで、大きさをまともに考えてもしょうがない。私も、少し興味を持ってこの猿田彦を調べてみた。そうすると、面白いことが判ってきた。何事も知らないことが多いですね。

それは、猿田彦が天照大神の命により地上に降り立った神(邇邇芸尊)の道案内を終えると、天宇受売命(あめのうずめ)が猿田彦の生まれ故郷である伊勢国の五十鈴川の川上について行くのです。そして名前を「猿女君(さるめのきみ)」と呼ばれるようになるのですが、どうもこの女性の姿がエロっぽく書かれてもおり、二人は結婚したと考えられています。また猿田彦は伊勢の海でおぼれ死んでしまいますが、日本の神話は単純なようでわかりにくいです。

さて、猿田彦はこのように伊勢より南側の行動しかないのですが、ここ常陸にも祀られたところが多く存在します。またこのようにお祭りなどで登

場します。

石岡の大覚寺の少し先を羽黒の方に進んだところに桜川市「猿田」という地名があります。

そこに猿田小学校があります(現在は桜川市羽黒小学校と合併統合)全校生徒54人です(2011年当時)。猿田と言う地名は実は銚子にもあります。銚子にも時々出かけていますが通る時に見かけてやはり気になりました。もつとも、私の娘にいわせれば「こんな名前の小学校ではかわいそう」とも言っていました。何時の間に猿が嫌われてしまったのでしょうか?

猿田彦は道案内の神であるので「道祖神」として考えられたり江戸時代の庚申講との関係もいわれてきています。ところで、常陸には「猿田」という名字が多いそうです。常陸大宮周辺に多いと聞きます。(昭和初期まで猿田銀行もあった)昔の名前などを考えるときに漢字から考えるとわからないことが良くあります。

発音などを調べてみるのも良いのかもしれませんが「去る」「佐瑠」「佐太」「戯人」や琉球語?縄文語?などとの関連も面白そうですね。

どちらにしろ、私には詳しくはわかりません。知っているのは猿田彦が天狗の顔のようだということだけです。

### ・長楽寺の天狗

さて、石岡市龍明というところにある「長楽寺」という寺にまつわるお話です。もともと龍明という地名ではなく「猪内(むじなうち)」という地名でした。名前のように昔は猪がたくさん住んでいたといわれたような場所ではなかったかと思えます。

この寺を有名にしたのは映画やテレビのロケ地として売り込まれたためです。まわりに電線や電柱などがありません。時代劇の撮影にはもってこいですね。映画「座頭市」や『三日月伝』の撮影にも使われました。



この場所に最初に行った時は、道が判らないのできらめ、二度目は入り口がわからず、前を素通り。今は少し入口の道路を整備していますが、最初の方には判りづらいところでした。この寺の歴史などはゆっくり調べることにして、テーマは天狗です。この長楽寺の住職が天狗になった話なのです。

昔、筑波山、加波山、難台山、愛宕山などに、多くの天狗が住み、修業を行っていました。

ある時、この長楽寺には年とった母が一緒に暮らしており、この母の願いである「津島の祇園」を見たいというので親孝行の長楽寺は岩間山(今の愛宕山)の天狗にお願いして、毎日天狗の修業をしてとうとう天狗になることができたのです。

この長楽寺の庭にはたくさんさんの石碑が置かれています。

一つ一つ見ていくと面白いものもあります。諸国をまわったという六部などの碑もあります。

天狗の腰掛石などというのものもありますが、  
どれだか？

### ・愛宕山の天狗

岩間にある愛宕山の十三天狗の話です。

この山は昔、岩間山と呼ばれ、場所も常磐線の岩間駅にも近い場所ですが、石岡市とは隣接しており山の反対側は石岡市の真家地区になります

この山を私はずっと桜の名所としてしか見てきませんでした。少し遅めに満開を迎え、下から上にある神社に向かって桜並木が続きます。

上の神社の少し手前まで車で登れ、そこからの眺めがとても素晴らしいところです。

しかし、ここは十三天狗が修業していた所としても有名なのです。今は笠間市になっていますが、現地に行っても「あたご天狗の森」などと名前を付けてPRしています。

何故、ここを紹介するかと言うと、この前に照会した「長楽寺」の天狗になった和尚が、ここにいた十二天狗の仲間に加わって、十三番目の天狗になったと伝えられているのです。



愛宕神社は徳一法師が創建されたという古く謂れ

のある神社で、防火の神をお祀りしている珍しい神社で消防団の方などがよくお参りされているようですが、是非いかれた時はその裏手にある「飯綱神社」へ行ってください。

この飯綱神社の本尊はその裏に回ると見られますが、六角形をした金属製の塔で「六角殿」と言います。この六角殿はまた六角形の石の上に建てられ、この石は手足などをかたどった亀だと言います。

この六角殿を背後から守って取り囲むように十三の祠が置かれています。これが十三天狗の祠です。さて、長楽寺は寺の名前ですが、天狗の仲間となった時に、この天狗は長楽寺と呼ばれていました。そして、最後に加わったので、面白い言い伝えが残っています。

人が集まる席に誰か一人が来ていないと「長楽寺はまだ来ていないのか？」「来るまで待とう」などと言うようになったそうです。また、毎年12月にこの天狗の祠にまつわる「悪態祭り」という変わった祭りがあります。悪態を言い合うとても変わったお祭りです。

### ・天狗小僧寅吉

愛宕山（旧岩間山）の十三天狗の話は、江戸時代後期の国学者「平田篤胤」が書いた「仙境異聞」によるものです。これによると、当時、江戸の町で天狗にさらわれてまた戻ってきたという寅吉という少年が評判となりました。

そこで、この平田先生が、自宅に連れてきたという形式の書物です。

平田篤胤は本居宣長の後を引き継ぐ学者として有名な人で、けして作り話を書くような人ではない

のだが・・・

当時、平田篤胤は、神や異界の存在、さらには死後の世界に大きな興味をいだいていたといえます。天狗に連れられて天狗の世界を見てきた寅吉の話を要約すると、

・最初に連れてこられたのは獅子ガ鼻岩という岩が突き出ていることで知られる南台丈という山であったが、いつの間にか岩間山になっていた。

・岩間山には十三天狗がいて、その首領の「杉山僧正（そうしよう）」が寅吉の師匠である。

・岩間山には最初十二天狗であったが、途中で長楽寺が加わって十三天狗になった。

・人間から天狗になったのは長楽寺だけで、その他は鳥や獣などが形を変えたのだという。

・長楽寺はその十三天狗の首領となった。

となつています。平田篤胤は山神として天狗の存在を真面目に信じ、研究をしています。

そして、その姿を絵師に書かせ、宝物にしています。この神の姿はあまり今の天狗のイメージとは違います。学研の「神仙道の本」表紙などに使われています。

この絵にも下の方に白鹿が描かれています。

また寅吉が、最初に降り立った山「南台丈」は、南北朝時代に合戦が行われた悲劇の山「難台山」のことです。天狗の鼻のように突き出した岩（獅子ガ鼻岩）があります。

### ・烏天狗

カラス天狗の話です。長楽寺の和尚が天狗になった時、その他の十二天狗は鳥や獣が修業して天狗となったと書かれています。天狗は大きな羽根を背中から広げて空を飛ぶとされていました。

そして、天狗の姿を現した中に口がとがったカラ  
ス天狗の話があります。物語にも良く出てきます。  
鞍馬山で牛若丸の剣術の修業をしたのはこの烏天  
狗だというものです。

カラスが天狗になったというものと思いますが、  
どうも各地に伝わる河童伝説にもこの烏天狗が関  
係しているようなのが興味をひきます。

大昔、インドあたりから伝わった時には天狗は流  
れ星のことを指したと書かれているのを読んだこ  
とがあります。

それが何時の間にか、カラスなどと人間が合体し  
たような天狗が現れ、その後、猿田彦のような鼻  
の長い天狗が出現します。

東京の西端に位置する高尾山は天狗の伝説でも知  
られたところです。

私も子供の頃から中学生ころまで良く登りました。  
ケーブルで登って向こう側の相模湖側へ下るハイ  
キングコースなどは吊り橋などもあり楽しんだも  
のです。最近では外人にも人気があるといわれてい  
ます。この山の上に高尾山薬王院があります、  
ここに天狗の像があります。右が鼻の高い大天狗、  
左が烏天狗の小天狗の像だといえます。

どうも烏天狗は鼻の長い天狗の子分のようなすね。  
そして大天狗は団扇を持ち、小天狗は剣をかかげ  
ています。どのようないわれがあるのでしょいか。

天狗が団扇を振ると大風が吹いたり、雷が鳴るの  
でしょうか。自然現象も山の神・天狗や鬼の仕業  
であるというおとぎ話は沢山ありますね。

山には龍神が祀られ、雨などを祈願したりもした  
のでしよう。天狗の話ではありませんが、最初に  
書いた「猿田彦」と共に故郷伊勢に連れて帰った  
「猿女君（さるめのきみ）」こと、天宇受売命（あ

めのうずめのみこと）は、太陽神をあらわす天照  
大神（あまてらすおおみかみ）が天岩戸に隠れて  
しまい、この世が真っ暗になった時に、この岩戸  
の前で踊って桶を打ち鳴らし、岩戸を少し開けさ  
せるのに成功したとされる神です。

この話は、子供の時に読んだ昔話に出てきました  
が、この踊りの姿は、私が昔読んだ内容とは大分  
違うようです。宇受（うずめ）は「かんざし」の  
ことで、この神は、今の巫女をさし、踊りは神楽  
であるというような表現がされています。

しかし、古事記などの表現では胸を露わにしたト  
ップレスで、腰の紐を下まで下ろした姿で踊って  
います。このような姿の踊りを連想すると、ブラ  
ジルの「リオのカーニバル」のサンバやエジプト  
ナイル川の船の上で踊られている「ベリーダンス」  
などを思い浮かべてしまいます。

どう見ても、今の優雅な巫女踊りからは想像がで  
きませんね。この「天宇受売命」が「おかめ」面  
のモデルのようです。話題がそれますが、この「お  
かめ」（天宇受売命）と天狗（猿田彦）は夫婦にな  
ったと解釈されています。

これは、どうも違う民族の男と女が融合すること  
を意味しているとも解釈されているようです。  
アダムとイブの話とはまた少し違うようです。  
(2011年1月のブログから)



## 哀れ

伊東弓子

「もうすぐ、弥生三月の暦を捲ることになるね。  
早いものだね」と、友の口から出た言葉。「ああ、  
こうして十二枚捲り、何度繰り返してきたことだ  
ろう。振り返ってみると私の人生も喜怒哀楽の繰  
り返しの日々だったとあらためて思った。でも私  
の経験などは甘いものだったかもしれないと振り  
返りながらも頑張ってきた自分を誉めてやりたい  
とも思う。

春が来て浮かれ気分が時期だが、哀れを感じた  
極身近な出来事を紹介したい。

二十年代前のこと、隣り町に行くのに谷津田と  
里山の際の道を走っていた時、よく知っているS  
さんに会った。私より二十才年上で歴史が好  
きで、とても詳しい人だった。Sさんは時間があ  
るかか聞いてきて話し始めた。「俺が六ツか七  
ツの頃、爺さんと隣り町へ行くので丁度この道を  
歩いていたら時だった。」と話が始まった。「ほー  
れ見ろ！ 煙がのぼってる。ああ！ 又、肺病た  
かり死んだ」と、声を上げた。爺ちゃんが指さ  
す山際の方に細い煙が上がっていたのを見た。そ  
の時は何の事か分らなかつたが、その煙を何故か  
さみしい思いでみた。後でいろいろと分かったと  
の事だった。あの頃、あの病気にかかると治らな  
かつたそうだ。病人がいる家の傍や前は通らな  
かつたり、遠回りしたという。一人が亡くなると家  
中で病気になること恐れられ、気の毒だが村中で嫌  
がったそうだ。息を吸うのも怖がり手拭いで口や  
鼻を押えて歩いたという。田圃の水は大丈夫か、  
米は喰えた、野菜は、と心配したもんだと、聞

いたそうだ。その病気で人が死ぬと六道と坊さんが村外れまで送ってきて、そこで焼場の人に戸板に乗せた死人と身につけていた着物、布団を渡した。坊さんは焼場に届くような大きな声でお経を唱えていた。足元には佛に似せた石と花が置かれてあった。病はきらっても、亡くなった人への思いはそれぞれの形で表せられたのだろう。こういう病氣の人を送る六道の役目は嫌がられたが、廻り順だから仕方ないと思っていたのだろう。誰も口には出さなかったという。坊さんと六道は無口でかえっていったそうだ。亡き人を運ぶ人達はその山に住んでいて焼場だけの仕事をしていたそうだが、周囲からは人扱いはされていなかったという。江戸時代の名残りを残した身分扱いの生活をしてきたそうだ。

その後十年位経ってから聞いた話によると、焼場の反対側に病院のような建物があったという。高台の北側にあり、一日中、陽は照らず、湿っぽい場所と条件としてはひどい所だったと想像がつく。病人にとっても、世話する人にとっても生きる、生かそうとする場所ではなかったように思う。終戦後らしいが、その建物のあったという場所の近くから人骨が沢山出たそうだ。

随分長話しをしたが、私にとって新たな歴史の一部の話が聞けてよかったが、悲しく哀れな人の姿を見た。私の走っている谷津田と里山の間をいく細い流れも大昔の海の名残りだ。大小さまざまな古墳がつけられ、私が向かおうとしている町は都に匹敵する都市が栄えたところだ。戦国時代も争いに明け暮れ、その時々何を目指して精いっぱい生きていたのだろうと遠い昔を偲びながら走った。その後、船の海上交通から線路が出来、新し

い時代にと歴史を作ってきた。あの病気に罹った人も病人を世話した人もその時代を造ってきたのだ。現代になってこの地も公害問題がおきて、近隣の土地や水までも汚してしまったことは、日本公害の始まりとも聞く。現在何十年前からの計画とか、田・畑、先人の作ってきた文化も山をも壊して又、すごい道路が出来た。本当に必要なのかと・・・一人ぼやいても仕様がいないか？

晩秋の頃、息子の作業場に住みつこうとして三匹集まった野猫達、唸り声を上げながら走り回っていたが、後からやってきた二匹を追い払い、とうとう天下をとった一匹の黒猫が居座った。全身が長めの黒毛で覆われた中に白毛も交じっている。目の光は鉛い。長年、野良生活で鍛えられたせいかだろうか。体中の毛に、がしやつばの中で生活してきたのだろう泥棒草をくつつけ、ぶらさげ、埃っぽい感じ、毛玉も沢山あるようだ。なかなか近づいてこない。警戒している様子がよくわかる。でも顔の丸さと手の動き、それに後ろ姿がいい。腰からお尻にかけての長めの毛がだぶついている。一寸昔の田舎の婆さん達のもんべ姿に似ている。その格好に愛着を感じる。日を重ねるにつれ慣れてきた。家族が一人増えた気持で接している。犬と猫と私の時間を必ずもっていかうと決めると、忙しさの中に楽しさが増えた。ところが夜になって土間に入れようとしても入ってこない。入口に座ったまま、じっと外を見ている。声をかけてもそのまんま、じっと外にいる。何を思い、何を考えているのだろうか。そんな姿が何日も何日も続いた。見るに見かねて抱いて用意してある寝床へ連れて行っても、すぐ飛び出して暗の中

にでていってしまふ。何がそうさせるのかわからないまま涙だけが出てきた。それから抱いて子守歌をうたって、暫く抱いていて、そおと寝床においてやっても、すぐ飛び出していくのだった。焦らず、気長に自分に言い聞かせ毎日繰り返して続けた。犬は気持よさそうに寝ついている。一ヶ月経つ頃には、「ニャー、ニャー」声を出すようになった。こんな日々の中で子供を育てていた頃のことを思い出した。

「俺は、真中まんじゅうなんだ」と、言っていた子、言いたいことを言い、やりたいことをやっていた子の淋しさは何だったろう。

「あーたんの赤いおっとな、いいよ。いいよ。」と、一人寝する小さなお姉ちゃんぶり。

「口数少ない、我慢強かったお兄ちゃん」言いたかったことも沢山あったろうに。

「私の意を先取りするように、よく手伝ってくれたお姉ちゃん、私を助けようとして一生懸命だったんだらう。みんながくれて、いっぱいあるよ。いっぱいね」と、お下がりをかかえていた末っ子。

あの頃の私、子供の一人一人が言っていた言葉が何を言おうとしていたのか、考えてやったらうか。

あの時、淋しさにそってやれたらうかと、思い出してみたが、充分ではなかったと思う。あの日の淋しさや不満に答えてやれなかったことは許してもらって、自分の人生を大切にしたいと願うばかりだ。子供一人一人と野良猫を重ねて眠る日が続いた。がさ敷の中で寝たのか、濡れて帰ってきた時もある。体に傷を作ってきた時も何度かある。その度に犬が嘗めて治してくれた。ここで

二匹の共同生活が芽生え、人間と犬と猫との生活が楽しさにつながってくれと思う。名前を“ミ

「ヤータン」とつけた。

人にも犬にもそして猫にも生きていく中には哀の悲しみがあり、叫びがあり、乗り越える力を持つているから、本当によかったと思うこの春だった。

暖かくなったので、友の家を訪ねるのも苦でなくなった。家に行く楽しみの一つに、長閑な光景に感じられるものがある。少し前まで林が続き、上池・下池、大池・小池があつて谷津田と里山を延々と流れていたが、今は湖に注ぐ水も少なく、竜の話も絶えてしまいそうだ。工場が建ち並び、住宅も増えた。人がひしめき、流れは水路となった。

鳥や小動物も安らぐ場所がなくなり、鳥も止まる枝も少なくなり、あちこちで除草剤が撒かれるから虫達も姿を見ることがなくなった。鳥たちにとっては大きな死活問題。でも人間は小さな虫や鳥のこと等、気にもしない。友は「ピーちゃん」「ターちゃん」と声をかけ、パンを千切つて投げてやる。雀が、ひよどりが、目白がやってくる。鳥は少し離れた所で残り物を待っている。みんな生きることのできだ。食べなきゃ、生きていかれない。熊が、猪が、鹿がとニュースを賑わしていたが、食べる物が欲しいのだ。自分達では作ることが出来ない彼等はただ捜すだけなのだ。食べ物が欲しいだけなのだ。

田も畑も作らず、山も放つたらかしの人間はどうなるのでしょうか。哀が最後をむかえることになるのでしょうか。

白井先生は二十四節季を大切に考えておられました。昨年の原稿は故郷の季節を強く感じたかったので、それにちな

で書きました。農事暦、高島暦を参考にさせて頂きました事、ご紹介が遅れましたこと、お詫びいたします。



## 風と共に 《理》(34)

大輪啓展

季節毎にテーマを変えて、

今回のテーマは、「継承」

季節の移ろいは早いもので、桜の満開が長く続いて欲しいと願う日々となりました。お花見は天気の良い日にしたいものですね。

さて、今回のテーマは継承です、日本の伝統文化・運動・知識と様々なものが継承され、今現在の形として生き続きます。

私たちの身近な所でも、親から子へ、先輩から後輩へなど、形のあるものから無形のものまで、代々受け継がれていきます。

私自身、今現在の仕事には、就きたくて始めたものではありませんが、当然愛着と言うものがございます。

その中で、私の芯ともいえる根っこの部分、この会社のみならず過去を振り返った中でも、常に意識して実践してきた事、人材開発・育成です。

歳を重ねる毎に実践方法は研ぎ澄まされ、ノウハウとして確実なものに向上している事は、自身の評価でも過剰ではないと実感しています。

ありきたりな事の繰り返しです、忍耐が無ければ人を育てる事は出来ません。

相手が呼応しなければ満足のいく結果にもなりませんし、その様な事が続けばやり甲斐もなく途中で諦めてしまう事も多々あるかと思えます。

他人ですから、自分の思う様には行かないという事です。

HowToものではありませんので、人材開発・育成についての自身はあえて語りはしませんが、今現在、私想いを継承し後世に残して行こうと、続いてくれる人達がいます。

先日、会社の新年会を開いている時の一コマにこの様なやり取りがあり、私自身も継承されている事に気が付かされました。

こんな一コマでした、  
「なぜ、今の地位についてなにを成そうと考えますか？」

部下からの何気ない一言でしたが、私はこう答えました。

「私自身出世欲があった訳でも無く、何かを成そう等と大それた事は考えてはいないよ、結果として今この地位に立たせてもらっている事には責任があつて、その責任を果たす中で自分自身が出来る事を精一杯やるだけ、あえて今に力を入れてやっている理由としては、尊敬する上司が良い評価を得られる様に手助けする事、微力ではあるけど

その様な事によって、もつと上にながって、会社で、会社に蔓延る悪しき習慣を断ち切つて、皆が働き易く出世する事を躊躇わない様な会社に、いつか成れば良いなど言う所はあるよね。」

この様な会話の後、  
「僕も一緒です。あなたが上司だから努力し、少しでも上にながって欲しいと、それが会社の為になると感じるから、自分のこだわりを捨てて日々の業務に望んでいられるんです。」

上司冥利に尽きるなど、初めて感じた瞬間でした。意識して努力してきた事ではありませんが、かといって手を抜いた仕事をしてきたつもりはありませんでしたので、その様な不意の言葉に何とも言えぬ達成感を感じました。

出世とは誰かの上に立ち、誰かの下につく、これの繰り返しです。  
誰かの上に立った時、如何に自身が成長できているか、どれだけ部下や同僚に気遣えるか、それによつて部下となる方にはその後の進路が大きく変わる訳です。

私の信頼する上司からは、社内の問題児を育てる様依頼が来ます。  
様々な方を教育して来ましたが、私にとつて本当の問題児と思われたのは、ほんの一握りでした。

問題児とされてた1人と1人と正しく向き合つて、話に耳を傾け、本心を探る事に成功して、相手が何を望んでいるのか、どうして欲しいのか、そこさえ理解すれば、良き相談者となり、良き上司のとなり、むしろその様な経歴から発展した信頼関係の方が、より一層の濃さを伴うのではない

でしょうか。

他では手につけられない、言う事を聞かないとか、仕事が出来ない、本当にそうでしょうか、前段で述べた通りほんの一握りでしょうか。  
ではなぜ先ほどの様な噂がたつのでしょうか？

そこに、人間の浅はかさと言うか、愚かさと言うのか、これが関わってきます。  
ある男は、私に憧れ・私と同じ様に一目置かれる存在となりたかつたのでしょうか。

ですが、他では傷つけられて来た、心を閉ざした人間を早々取り込める訳ではありません。  
その男には器も無いのに簡単に見えたのでしょうか、実際に問題児と呼ばれる何人かを受け入れたかと思つたら、たつたの一月で他の職員を巻き込み、最悪の崩壊状況に陥つてしまったのです。

自分の実力すら把握していかないのに、他の人を思い遣り味方にする事など、到底夢のまた夢ですよ。  
信頼を得て同じ方向を複数人に亘つて向かせる事、制御していく事、簡単ではありませんが、それを成し得てこそ、初めて尊敬の念を抱かれ、自身自身の想像を超えた未来が待っているとそう思います。

その様な積み重ねの中に、自分自身の継承者が現れていくのではないのでしょうか。  
有能な皆さま、ぜひ優秀な継承者が現れる様、よろしく願います。

そして、努力さえすれば、全員にそのチャンスはあるんです。  
諦めた瞬間にそのチャンスを失うんです。

それではまた次回。

## 夫婦岩

小林幸枝

去年の12月中旬、千葉県いすみ市岬町和泉の海岸（九十九里浜の南端部）にある人気観光スポット・夫婦岩（ふうふいわ）に立ち寄りました。大きな岩に穴が開いていてアーチ状につながった小さな岩。とても美しい芸術の像のようなイメージでした。  
しかし、昔の写真より穴が大きくなっていて、その穴がいつか、崩落してしまうのではないかと心配になりました。



(アーチ崩落前)



(アーチ崩落後)

この夫婦岩は、港があった津々ヶ浦の岩が浸食によって大小二つに分かれ、風光明媚な景観から写真や映像の撮影地としてとても人気がありました。

この岩を目当てに星空観察、海辺散策などに訪れる人も多く、また潮が引くと歩いて岩まで行くことが出来ます。説明によりますと、数年前から大きい岩に穴があき始め、それが徐々に広がって行って、穴でアーチ状になった部分が今回、崩れ落ちてしまったのです。岩が半分になったように見えます。

今年の正月の地震発生で崩落したのでしょうか？1月中旬にまた見に行ってきました。やはり、この寄り添うように大きな岩に寄り添うように一体となっていたアーチ状の部分が消滅してしまったのは本当に残念です。寂しいですね。今はこうして二つの岩の間に入る朝日などを撮影する写真スポットにもなっています。

## 水戸藩の天狗党について(1)

ヤマナカタダオ

私は、今年の1月で81歳になりました。

私は、昭和42年1月に山中家に婿養子になり、現在に至っております。私の先祖は、水戸藩の武士でした。祖父は明治九年生まれで、祖母は明治八年生まれです。明治30年頃に、土浦に移り住みました。私の父は8人兄弟の男の三番目でした。子供の頃に聞いた記憶では、曾祖父は、江戸時代の生まれで、天狗党に入っていたとの事でした。

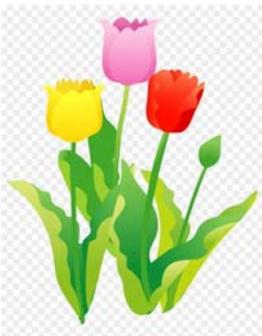
今年の三月に(三月十六日)に、北陸新幹線が福井県の敦賀まで延びました。天狗党一行は、京都まで行く途中に、敦賀で幕府側に捕まり、処刑されました。今回は、何回かに分けて、天狗党の

事について書いてみます。

水戸藩の水戸学は、水戸藩主、二代水戸光圀の「大日本史」編纂を通じて形成されました。

やがて第九代藩主、徳川斉昭のもとで、尊王攘夷思想を發展させ、明治維新の思想的原動力となった。ところで、水戸学の中心人物は、藤田幽谷の門下、会沢正志斎、藤田東湖、豊田天功らが、その後の水戸学派の中心となる。一八六四年の十月末日に、武田耕雲斎を総大将に、千人余の一隊は、京都に上り、尊王攘夷の素志を朝廷に訴えることとした。大部隊は、総大将のもと、大軍師の山国兵部輔翼は、藤田小四郎、竹内百太郎(かすみ)がうら市出身)、天勇隊、虎勇隊、竜勇隊、正武隊、義勇隊、奇兵隊などを編成、11月1日に大子を出立、下野・上野・信濃・美濃を通り、越前新保に至ったとき、禁裏守衛総督徳川慶喜(水戸藩9代藩主斉昭の七男)率いる幕府軍の総攻撃のあることを聞き、降伏。耕雲斎ら823人が加賀藩に、投降した(12月20日)。一隊は、慶応元年(1865年)1月、敦賀の鯉(にしん)倉に監禁され、2月耕雲斎・小四郎ら352人が斬罪、他は遠島や、追放の刑に処せられた。

参考資料…「天狗党の跡をゆく」鈴木茂夫著 (つづく)



## 渤海国武芸王の古代日本国への国書

西方保男

東アジア古代の「渤海(ほっかい)」という国の歴史を考える。

西暦七百年、文武天皇二年、中国の東北部牡丹江上流の広大な地域、満州平野に震(しん)という国が誕生した。その後、国名を「渤海」と改め、唐の文化を基調に栄えた王国らしい。ところが、新羅や百済の名を知っている人はいても、渤海という国を知る人は案外少ない。それは、相次ぐ戦乱により歴史書をすべて焼失してしまったからだという。その後、国家らしいものは建設されない。したがってその跡地には千年以上現在にいたるまで国家らしい国家は形成されることがないらしい。ただ、一九三二年(昭和七年)、日本が帝国主義的侵略政策によって傀儡(かいらい)政権をうちたてた「満州国」がその唯一の例のようだ。だが、その「満州国」がわずか十三年で崩壊して、そこは再び境界の地となり、渤海国の版図だった地域は、中華人民共和国の東北部、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、とロシアの極東部と三つの国に分断されて、どうも一つの地名単語でまとめて表現できない地域となってしまう。

しかし、わが国には「類聚国史(るいじゆうこくし)や「続日本紀(しよくにほんぎ)」「三大実録」などに、正確な国交の全貌

が伝えられている。これら文献によって、わが国と渤海王国との交流が、非常に親密であったということを知ることができ。その文献資料の一つ「北倭記(ほくわき)」から、我が国と東アジアの古代文化国家渤海王国との関係を考究してみよう。

神龜四年・七二七年奈良時代、十二月二〇日、満洲にあった渤海国の使節が日本を目指して来た。その使節団は寧遠(ねいえん)將軍高仁義(こうじんぎ)を将とする二十四人であった。だが、日本を目指す途上、沿岸を北流する対馬海流に流され、運悪く出羽の地(秋田県北部から青森県にかけての日本海沿岸)に漂着した。その時、高仁義以下十六人は蝦夷(えぞ)によって殺されてしまった。

しかし、残った八人が命からがらに、武芸王(ぶげいおう)の国書や土産の貂皮(てんのかわ)三百枚をしつかりと守って脱出し、四カ月後に長旅をへて、平城京に入ったという。

彼らが大事に守り通して持参した渤海国武芸王(ぶげいおう)の日本への国書は、続日本紀に次のように記されている。

「武芸啓。山河異域、国土不同。延聴風猷、但増傾仰。伏惟大王、天朝受命、日本開基、奕葉思光、本枝百世。武藝忝当裂国濫惣諸蕃、復高麗之旧居、有扶余之遺俗。以天崖路阻、海漠悠悠、音耗来通吉凶絶問、親仁結授、庶叶前経、通使聘隣、始乎今日。」

「武芸啓す。山河域を異にして国土同じからず、延(ほの)かに風猷(ふうしゅう)を聴きて但傾仰(ただけいぎょう)を増す、伏して惟(おも)うに、大王の天朝命を受け、日本の基を開き、奕葉(えきよ)光重く本枝百世なり、武芸忝(ぶげい)かたじけなくも列国に当たり、濫(すべ)ての諸国を忽(すべ)る。

また高麗の旧居に復して、扶余の遺俗を有(たも)てり。但、天崖路阻(てんがいみちへだたり)、海漠(ひろ)く悠々たるを以て、音耗(おんもう)未だ通ぜず、吉凶問うことも絶ゆ。親仁(しんじん)を結び援(あ)わせん。庶(ねが)わくば前経に叶い、使を通じて隣に聘(へい)すること今日に始めん・・」。

史家鹿島昇は「北倭記」で、この神龜五年の渤海使の国書は重大な内容を含んでいると次のようにいう。

「大王の天朝は命を受け、日本は開基す。奕葉(えきよ)重光し本枝百世なり。武芸・・高麗(こうらい)の旧居を復し、扶余(ふよ)の遺俗(いぞく)有りという文章は

- 一、渤海は扶余(ふよ)の後継者であり、
- 二、渤海と日本は本枝の関係にある。
- 三、大王の日本もまた扶余の後継者である、

と主張しているのである。

そこで、始めて天皇家扶余(ふよ)説を主張したのは、長い抑留のち帰国した考古学者江上波夫であったが、江上は

抑留時代にソ連の文献でこのことを識ったのであろうか、というのだ。

### 中国の周王権と倭王権の共通性を考える

悠久の歴史から、中国と日本には幾多の共通認識が見られる。そうした視点を探るに当たり、畏友からの贈呈本を参照していく。

ここでは「日本」とは何か、あるいは「日本人」とは何か。それに関してあらたな文明論、基本的には「倭」の歴史を眺め、従来の歴史の理解の基本の一つ、地理的な世界観を認識すると。

万葉集に、海岸のない奈良県において、その南部に位置する地方の吉野に関して磯(いそ)こぎ廻(み)つつ島伝(つしまつた)ひ見れども飽(あ)かず 三吉野(みよし)のという歌があり、また奈良東部の山間の泊瀬(はっせ)についても

海小船(うみせうせん) 泊瀬(はっせ)の山に  
という歌があり、いずれも海岸を船が行く情景が詠まれていた。

### 地名と伝承の移動

地名とその伝承が二つ(複数)の地方に分かれて移動していたと見られる例はいくつもあるが、倭と常陸の小泊瀬山の石城にこもるということが共通する次の歌が典型的である。

「小泊瀬山の石城にも隠(こも)らば共に」

(『万葉集』)

「を初山(小泊瀬山)のいはき(石城)にも

み(率)て(こもらむ)」

(『常陸国風土記』(新治郡)

これらについて、歌が一方の地方から他方へ移動していたとは考えにくく、もとは同じところにあった伝承であって、後に奈良県地方と茨城県地方に別れて伝わったとみることができるとある。

倭から鯨(くじら)が見える

『万葉集』に見られるもう一つの地理的な特色は、倭や淡海に鯨がいたという情景である。淡海大津宮大王(天智)の大生贄(おおもがり)のときの大后の歌がある。

鯨魚(いさな)取り 淡海(あま)の海を 奥(おく)き 避けて (こぎ)来る船

著者は、「いさな取り」は海に係る枕詞である。枕詞は、実際にある光景を詠むのに用いられていた筈であって、「いさな取り」が鯨がいなくとも機械的に海という語に係るとするのは不自然である。

この鯨がいるという淡路海(あま)の海は琵琶湖ではなく、この歌は、もとの海が鯨のいる海であったことをうかがわせている、という

なお、「いさな取り」は、『万葉集』では難波・住吉の海にも関係しており、枕詞が共通することから、淡海と難波ももとは同じ海にあったことをうかがわせている。また『万葉集』に、「神(みわ)の渡(わた)が「鯨(いさな)取り」の海にある」とある。神を「みわ」と読むのは、三輪山(三諸山)の神のことである。なお、三輪山の

神は、神光が生み照らして浮かび来たとあり(『日本書紀』神代八段一書)と海と関係する。このように、倭・難波・淡海はもとは同じ海岸にあったが、その後、それらの地名が奈良盆地・大阪湾・琵琶湖に分かれて移動したと見ることができ

る。以上から平井進によれば『万葉集』と中世(主として十世紀～十四世紀)の和歌は、もとの倭王権の世界(神話・地理)の伝承をうかがうことができる貴重な宝庫だといふ。その神話は、『日本初期』にあったものが中世に変容したのではなく、『日本書紀』の王権が消失しようとしたが、宮廷・朝廷上層部に伝わっていた古い伝承が用いられていたのであり、『日本書紀』が正統としての権威を失ったことにより和歌の世界にも古い伝承が復活していたものと思われる。

『万葉集』と中世の和歌』は、もとの倭の地理世界を理解していくに当たり、重要な分野なのであるといふ。

次に

舟の儀礼にみる当初の周王権と

倭王権の共通性を考える

周の『詩経』において、魚が多いことは周廟(寝廟)での宴のテーマであったが当初の周王権と漁撈の関係が深かったことについて見ると

戦国時代の『礼記』は周の季節儀礼を示しているが、季冬の月々に周の天子が梓獵師に漁を始めさせ、天子が自ら往つ

て嘗魚し、宗朝に薦めるものを得るところに立ち会っていたとあるのは舟で魚を捕る場合だけであって、農耕にあつては見られないといふ。

天子の舟の儀礼

天子が舟に乗る記事ではその前に天子が舟牧に命じて舟を五度覆し、五度反させたといふ。

(「命舟覆舟、五覆五反。」)

乃告舟備具於天子駕。」)

舟を裏返すのはその舟の具合を見るためであるとされ、当時すでに意味がわからなくなつてその所作だけが伝えられていたようであるが、天子が何事かを始める前の儀礼を、表していたと思われる。

「礼記」の天子が舟に乗る前に舟を「五覆五反」させるということに関しては、倭の神話にも参考となる記事がある。

「日本書紀」の日神が天の岩窟に入つて世界が聞になつたとの記事に

“日神が世に出るように天石窟の(あめのいわや)前で、天ウズメ命が稍(ほこ)を持ち馬上で所持するといふ。”

この記事には、海岸にあつたと見られる天香山(あまのいわくら)は海岸に近かつたと見られる。その所作は、鎮魂祭の儀礼でも同様であり、後代であるが「貞観儀式(じようがんしき)」鎮魂祭儀では、御巫(みこ)がうけ槽(ふね)を覆(くつがえ)しその上に立ち梓を以つて槽(ふね)を撞(つ)き、十度撞(つ)

く毎に神祇(じんぎ)伯が木綿の鬢(かつら)を結ぶとある。前記の天石窟での所作は、日神が世に出るときのもとなり、鎮魂祭は、天皇即位の前日におこなわれ、新たな大王が登場するときの儀礼である。

王権の儀礼において、舟(ふね)をふせるという所作(それを五度か十ど繰り返し返す)が共通していたことは、当初の周と倭の儀礼が何らか共通するものであったことをうかがわせている。

その場合、周の儀礼が、天子が世に出る(治世を始める)ときの儀式を表していたとすると、倭の儀礼が、日神とされる祖神が世に出るときのものであることと対応している。

周 天子が舟に乗る前に舟を五覆五反する。「礼記」

倭 祖神が世に出る前に天石窟の前で槽(ふね)を伏せる(日本書紀)

小さな舟の場合、浜にあげているときは、舟底を上にして置くのが一般的である。それ故、槽をふせていたとあるのは、本来(水上に浮かぶ状態のものを裏返していたのではなく)そのような儀式であった。周の儀礼においても、舟を繰り返し起き上がらせていたことが、舟を繰り返すようにみえたのである。

倭における矛で舟底を撞くという所作は、「礼記」には見られない。

「礼記」の舟の記事は周が当初は海人王権であった時代の儀仗儀礼であって、周王権が内陸に移動した後も行われていた

とは考え難く当初の周王権の儀礼の記憶が何ら残っていたのであるが、全体像と意味は分からなくなっている。倭王権の舟を伏せる儀礼と当初の周王権の儀礼とが関連していたとすると、本来、これら王権が共通していた可能性を示しているのではと思われる。

#### 参考文献

- 倭の原像 平井 進
- 北倭記 鹿島 昇
- 渤海国の謎 上田 雄
- 建築古事記 岡野 忠幸
- 日本書紀 宇治谷 孟
- 常陸国風土記 秋本吉徳

#### 【風の談話室】 《読者投稿》

やまと暮らし (76)

さと女

暖冬なのに寒い日が続く・・・暖かい日の後に来る寒い日が辛い?そして暖冬の年は、降雪日が多いと言う?今年に入って、筑波山が白くなったのは何回だろう・・・?

#### 【1月】

・新年おめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。年末には、横須賀の姪から三浦半島の海鮮物が届いた。正月には来る息子達のために、おせちでも作ろうと思つていて・・・。思いがけない知人から、大層立派なおせちが届く・・・そんな訳で、今年は何もせずで・・・。

今朝、おせちを前に、平和の有り難さに感

謝・・・今年こそ希望の持てる明るい年になりますように!!

・朝から激しいモーターの音・・・。昨年伐採した大きな樺の木(直径150センチ)の根元から20センチの厚さに輪切りをするとか?隣の家族総出(夫婦と息子2人)で、半日がかりでチェーンソーと格闘。チェーンソーが短いので色々方向を変えて切るが、水平がずれてしまう。貫通した時には・・・我が家(見学者)も含めて、思わずみんなで大拍手。その後ユンボで倉庫に運んで行った(1000キロを優に越している)。隣では、乾かしてテーブルにでもスッカ・・・!“と呟いていた。

・久しぶりの東京・・・姉の孫の結婚式に出席。大学の同級生の2人には、共通の友達が沢山出席・・・まるで同窓会のような賑やかさだった。祝う会の後は姪の計らいで、羽田にある昨年完成したホテルに泊まり。其処のホテルは、「てんくうの湯」ホテルの12階にある温泉(サウナ付き)で人気急上昇だとか?早朝に入った「てんくうの湯」の露天風呂からは、雪化粧の富士山を十分に堪能した。帰りは京急蒲田駅で旧友と会い、濃い時間を過ごし、2日にわたる東京満喫して帰った。

・今年エコクラフトの初日・・・皆さんと元気で顔あわせが出来た。今年辰年・・・お正月の間、干支の辰を工夫して作って来てくれた。よい年になる事を願って、楽しく過ごしたいと思う。皆さんへ、こちらこそよろしくお願ひします・・・皆さんの作品すごいですね。楽しみですね。

## 【2月】

・昼から、予報どおりに雪が降って来た。慌ててハウスのビニールを買いに・・・寸法足らずのビニールを買ってしまう。とりあえず固定して、次の日幅の××メートルを買い、張り変えた。夫は二度手間でも体力も倍かかり、クタクタのよう・・・私も微力ながら手伝った。ハウスのビニール張り替えを済ませた。最近は大端ない強風が吹くので、いつもよりしっかりと張ったというが、果たして何時まで持つやら？

・八郷に、また新たな名所が・・・そのオーピングセレモニーに行ってきた。ゆりの郷温泉口から湯袋峠に向かって車を走らせる。駒村清明堂の先にある、双魚園（今は閉店）を左に入り、くねくねした道を暫く走って行くとき止まり、そこが新しく生まれた施設だ。『すぐもり虫戸をひらく』（24節72候にある文言＝蟄虫啓戸）です。周りを森に囲まれ、多くの石や沢には清流が流れ、沢水の流れる音も心地よい。樹々と岩と水からは、自然のエネルギーが感じられ清々しい気持ちに・・・4月からオープンだとか？

・朝から雪がちらつく寒い日、薪ストーブを焚いて来客を待っている。近くの市にある映画館（土浦、つくば、笠間、水戸など）で上映中の映画、『石岡タロー』の監督さんです。夕方やって来て私の田舎料理を食べながら映画の話、撮影が始まってすぐに、コロナ禍で都内から出られなくなること数回。PCRキットを何百枚も買い検査をしながら、やっと撮影が終わった話・・・石岡の皆さんには沢山お世話

になった話など話つきません。土浦での上映も2週間の予定が4か月に伸び、つくばでも好評だとか、今後全国展開に向けさらに頑張っていかなばと話されていました。明日は土浦セントラルシネマズでの舞台挨拶があるそうです。映画の中のタローの姿、思い出しただけで目がウルウル。以前その話をしたら息子夫婦が是非見たいと、幸いなことに3月には、池袋シネマズで上映・・・早速知らせましょう。

・味噌仕込み・・・この時期には、これが終わらないとどうも落ち着かない。大豆は地元の農園さんで採れ丁寧に吟味されたもの。一晩水につけた豆の美しい事。麴も地元の麴屋さんのもの・・・外は強風なので、ストーブの上に蒸し器で3回にわけ、4時間程で、8キロ程の味噌を仕込む。これでひと安心・・・よく我が家に遊びに来る、あの人の顔が浮かびました。

## 【3月】

・ブックカフェ『えんじゅ』から、「弥生の茶会」のご案内を貰い、お抹茶と和菓子を美味しく頂いてきた。椅子での茶会だったので、どうぞ気楽にと言うことでリラククスして、美味しくいただいた。机に並んだ抹茶碗は春の季節感溢れる絵模様で、それらを拝見するだけでもワクワク・・・次回が楽しみです。

・善光寺楼門辺りに出来た『だのだの直売所』に、行って見た。なんとも可愛らしい、手造りそのままのハウスだった。此処で、可愛らしいおばあちゃま方が自分で作られたお野菜の販売をするのですね？諸々の要件を澄ました

後、場所の確認に行つて見ると、そこには偶然0さんとNさんがいて、ひとしきり三者会談に・・・やさとの名所になるといいですね。

・三寒四温・・・暖かい日が続く日々、姉家族と江ノ島探索に出かける。昔から竜神信仰の地として栄えた江ノ島はあちこちにパワースポットがあり、卒業旅行らしい若者で賑わっていた。海は穏やかで景色は素晴らしく、30年ほど前には何度も来たことがある所なのに、新たな感動が・・・。

## 石岡市内の道標・追分(1) 木村 進

昔の街道などの分かれ道などに置かれた道標（道しるべ）などを追分とも言っていたようだが、石岡の街にも江戸時代の追分がいくつか残されている。一つは「ふるさと歴史館」の東側に以前「府中城の陣屋門」が移転保存されていた場所におかれていた。この陣屋門は旧市民会館を建設するときにこの場所に移されたものだが、今は陣屋門も新築されて元置かれていた近くに設置されたが、復元というより新たに似せて作ったように思われ、昔の面影はかなり遠のいてしまったのは残念だ。ただ、今回は追分の話なので追分は置かれておいて、この少し前まで置かれていた陣屋門（保存文化財）の敷地の中にぽつんと置かれている追分についてである。現在、この旧市民会館はほぼ取り壊されてしまったが、この追分石はまだ寂しくふるさと歴史館への通り入口付近に置かれたままである。ただこれもここに置かれているだけで何の説明もありません。

この追分道標には「右 かさま 阿たご道」  
 「左 根あた里」横には「香丸町 鈴木〇〇・」  
 などと書かれています。判別するのも大変です。  
 少し丁寧な説明をかかげてほしいと思います。  
 さて、ではこの追分が置かれていた場所はどう  
 と、七谷家具さんのあるところの分かれ道の様  
 子です。昔の地図と対比してやっこの道標が置か  
 れていたであろうと思われる場所を推定してみま  
 した。

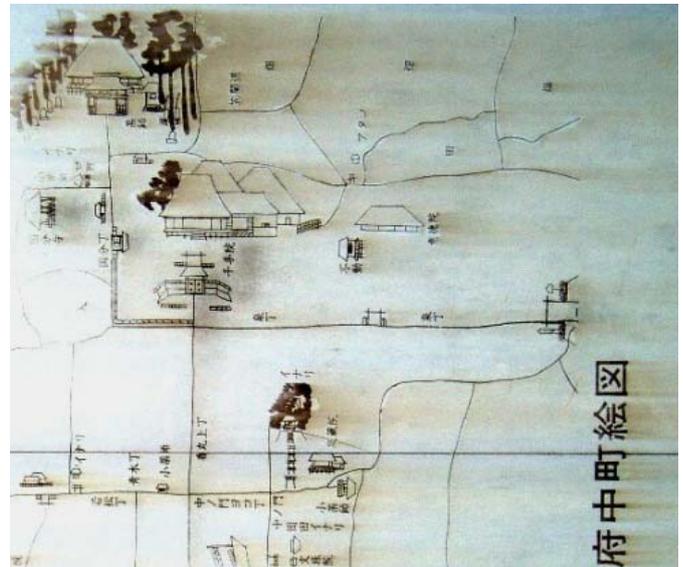


(上：2011年6月撮影)



(下：2024年4月撮影)

これは、江戸時代に書かれた手書きの府中の街  
 の絵図の一部です。これによると、現在の旧355  
 線が中町・香丸町と進むと、正面に「千手院」の  
 大きな寺院が見えてきます。  
 この千手院の山門の手前を右に曲がって泉町から  
 杉並へ向かうのが旧水戸街道です。  
 この水戸街道はこの先山王川を渡り、その先には  
 一里塚が両側に並び、その先には日光と同じよ  
 うな杉並木の街道が続いていました。  
 さて、千手院の裏に大きな「薬師」様と木々の茂  
 みが見えます。この場所が現在の国分寺があるこ  
 ろです。この図では左手手前に「国分寺」と寺  
 が書かれています。これは現在ありません。  
 昔の常陸国分寺は、この地図の「薬師」とあると  
 ころですが、この千手院も含めた領域になってい



この位置関係を、現在の地図に拙いですが書き  
 加えてみました。そうすると、昔の道がおぼろげ  
 ながら見えてくるではありませんか。  
 「右 かさま 阿たご道」「左 根あた里」の  
 道標の位置は、この推測ではNTTの建物の少し  
 手前から右(東)へ曲がる道があり、この道(今  
 の旧国道355号の1本東側の道)が昔の笠間方  
 面に行く街道でした。そのため、この道標があっ  
 た場所はこの曲がり角と推測されます。  
 この右「阿たご」は十三天狗の岩間山(現愛宕山)  
 愛宕神社のことを指すものと思います。  
 どうやら、この旧道の分かれ道にあったものを、  
 今の分かれ道のところへでも移動し、さらにまた、  
 全く関係のない現在の場所に移動したようです。



たと思われる。  
 (現在のNTTの建物も寺院の領域だったかもし  
 れません。)

## 石岡市内の道標・追分(2) 木村 進

石岡の町中に残された追分としてよく紹介されているものがあります。

場所は若松町の信号の真中に△エリアを設けて置かれています。



この写真に写る正面のガソリンスタンドは今はありません。現在はマンションが立てられています。



元文二年 巳四月日 (1737年)  
「左かきおか まかべみち」  
「右 うつの宮かわらい道」

左は柿岡街道です。今も真壁に行けます。右は瓦会を通って宇都宮へ行く「宇都宮街道」です。しかし、この宇都宮街道はこの先鹿の子遺跡の場所です。常磐高速で遮断され、その先は矢向へ行きます。柏原工業団地で途切れてしまっています。もう少し、この人馬が通った「宇都宮街道」の検証をしてほしいものです。

この道標の制作年は元文二年となっていますので、徳川将軍「吉宗」の時代です。

当時のこの街道はどのようになっていたのでしょうか。真壁、宇都宮からの道がここ府中(石岡)に入るために合流していったのです。

当時は府中の街はこの場所が北西方面からの人馬の入口でした。若松町も長法寺町と言っていた頃にはここまでが街で、この先は府中松平藩の武家屋敷などがこの先柏原池近くまでの領域にまよっていました。

しかし、宇都宮街道などは時代とともにルートがわからなくなってきたりしてしまっているおりに、この追分道標がとても貴重なものとなっています。大切にしていきたいですね。

### 大棒杭(おおぼうくい)

昔、道路の分岐点を追分といいましたが、棒杭(ぼうくい)とも言っていたようです。道の分かれ道に道案内を示した棒状の杭を埋め込んでいたのでしょう。この棒杭を「ぼうくい」と読むのですが、「焼け棒杭に火がついて・・・」などと使わ

れるあの棒杭です。

私も昔「焼けボックリに火がつく」などと覚えていましたので、結構多くの方が今でも松ボックリのようなボックリと思っているかもしれません。でも、焼け終わったと思っていた棒杭(ぼうくい)の火が消えていないでまた火がついたことをいうのですから棒杭が正解です。

さて、実はこの宇都宮街道と柿岡街道への分かれ道にも棒杭があったもので、今の道標が280年ほど前に作られたのですから、その前には木の棒杭があったでしょう。書物を読んでいるところの場所を「大棒杭(おおぼうくい)」と言っていたようなのです。

江戸時代にここ府中は松平家2万石の町でした。藩主は江戸にいてほとんどこちらには来ません。陣屋が現在の石岡小学校の場所にあり、すぐその近く(青木町から香丸町にかけて)に現在の刑務所のような牢屋のある場所がありました。

その罪人たちは逃げてみわかるように赤い服を着せられていて「赤ちゃん」などとも呼ばれていました。しかしその罪人が釈放される時に使われたのが、この大棒杭の方向の門だったと言われています。なぜなら、これは江戸の方面及び水戸方面(泉町)にある門はお江戸の殿様、また水戸様の方向ですから、罪人を釈放する方向とはできなかつたためといわれています。昔、若松町は1710年頃まで「長法寺町」と呼ばれていました。長法(峰)寺という大きな寺があったのです。この寺は明治3年の長法寺の火事とよばれる大火で焼失してしまいました。

ここ府中(石岡)は馬の集積地としてにぎわいました。

まわりから馬が集まってきており、馬市が開かれています。宇都宮街道から、また柿岡街道から馬が集まってきたといひます。

そしてこの長法寺の境内で市が立ったようです。この寺のあった場所には現在「木像十一面観音(指定有形文化財)」が置かれた小さなお宮(保管蔵)が置かれ、馬頭観世音の碑が建っています。

### 水雲問答 (5) (木村 進)

【はじめに】  
松浦静山 甲子夜話 卷39【1】より

これは江戸時代の(長崎)平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話(かつしやわ)」の中に挿入されている2人(水・雲)の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

雲：白雲山人・板倉綽山(しやくざん) 1785～1820年 上州安中の藩主

水：墨水漁翁・林述斎(じゆつさい)：1768～1841年 儒学者で林家(幕府の大学頭)中興の祖

松浦静山・松浦 清：1760～1841年

### (20) 偏心より事を成す

雲：

とかく大事を成就申候ことは、一心定まらず死を惜(おしみ)候所より生じ申候。その訳は、戦国の人、無学不術にして然も大事を創建候こと、他の技能あるに非ず、唯死を愛するを恥とする一

箇の偏心より、結局大事を遂げ申候やに候。

当世の人も、武夫(もののふ)たる者、死を愛せぬ偏心を腹中に貯へ申候へば、多少の怯心(けふしん)を省き、一心定まり申すべく存候。その上を学術にて修飾仕候はば、実(まこと)の人才にも成り申すべく候と考へ候。

(訳)

大事を成就することは、一心が定まらず(わけもわからず)死を惜しむところから生じるものと云います。その訳は、戦国時代の人は、学問をせず、特に極めた技を持たずとも大事を成し遂げているのは、特別な技能もなく、ただ自分は何かをするためにいつ死んでもよいという一途な偏心(一途に思い込んだ心)から大事を成し遂げたのだと思います。今の時代の人も、武士たるものは死を惜しまぬ偏心を腹の中にちゃんと持つておれば、多少の恐怖心も消え、心が定まります。そのうえで学術によって飾り付ければ、実際の役立つ人材になることでしよう。

水：

偏心より事を成す、面白き高論なり。これは古人の未だ言はざる所なり。ほんのことに有らざれど、棄てがたき所あり。殊のほかおもしろし。【然れども未だ学ばずといえども之を学びたりと謂はんの類にて、語に病あり。これをよくつずりとらば、至つて着実の説話ならん。】

これは書生の論のようなれども、氣質剛柔、清濁、いずれにしてもつまりの所、学を欠きてはならぬなり。況(いわん)や聖賢の学を為すはいかばかりのことならん。今師儒の法にて人才成り難し。

(訳)

偏心より事を成すというのは、大変興味深い意見です。このことは、昔の人も今まで言った人はいりません。少し癖のある表現ですが棄てがたい表現です。大変面白いと思います。【しかしながら、「未だ学ばずといえども之を学びたり」(まだ学んでいないと言いながら真髄を会得すればこれは学んだことになる)ということの類(たぐい)でして、言葉に語弊があります。これを表現に手を加えれば、現実にあつた説話(教訓)になりましよう。】

これは書生の論のようですが、人の氣質は、剛と柔・清と濁などとさまざまですが、学ばなければだめです。まして、その上に聖賢の学を学べば大層立派になるでしょう。ただ、今日の儒者、学者などのお抱えの師の教育では人材を育てるのは難しいと思います。

(コメント)

最後に、人材を育てる真の人材が少ないことを述齋先生(水)はなげいています。また、死をいとわずに(偏心にて)事を成した戦国時代の人のことは、その時代であつて、学問はいつの時代にも必要だと言っているようです。

### (21) 逆取順守

雲：

逆取順守と申す語、聖人の制にははづれ申すべきなれども、英雄の心事に候。逆取順守も時としては用処之れ有るべく候。聖人の道も時に依り役に立ち申さず、其の他姦雄事業成就仕(つかま

つ)るも凶に当り機をはずし申さぬ故に候。君子は多く義理に拘(かか)はり、時を失ひ申候ゆる事を仕損じ候。大率(おおむね) 姦雄は皆聡明穎利(えいり)、君子尽(ことごと)く正直愚拙(ぐせつ)。いかがの故にやと歎息仕候。

(訳)

逆取順守(ぎやくしゅじゅんしゅ) 中国の殷天下を奪いとつた後に、それを守るのに正道なよい政治を行ったことから、道理に背いたやり方で天下を取つた後は、道理を守つて国を治めること(いん) という言葉は、聖人の制には外れますが、英雄の心がけでしょう。したが、逆取順守も時としては用いることもあると思われます。聖人の道も時によつては役立たないことがあり、その他、姦雄(かんゆう) 悪知恵を働かせて英雄となつた人が事業を成就させるのも、計画を実行するのに機会を外さないからでしょう。君子の多くは義理にかかり、時期を失つて失敗してしまひます。たしいが姦雄という人々は皆、頭がよく、利益を得るのがうまいですが、君子は正直・愚直であり行うことがへたくそです。どうしてそうなるのかと歎いているところです。

水..

逆取順守、これを乱世に用ふべくして、治世に用ふべからず。治世に用ふれば大害を引出し、己も身を保つべからず。聖人亦一種の英雄。子の南子に見(みま) え、臆(ひつきつ)の畔(そむく) さへも咄(はな) さうとて出られしこと勢しるべし。後の君子は君子といふまでにて、技倆

(ぎりよう) なき者多し。これ書生の類にて、英雄と比肩すべからず。然れども君子小人の成敗は、如何にも高論の通りなり。

(訳)

逆取順守という言葉は、乱世で用いるべきで、この治世においては用いてはいけません。治世で使うと大きな害が生じ、自分の身を保つことが出来ません。聖人もまた一種の英雄です。(論語にあるように) 孔子が南子(いろいろ悪い評判も多かつた衛の靈公婦人) に見(みま) え、えるために出かけようとしたとき、また、臆(ひつきつ) 普の領地の一地域の長官。反乱を起した者) が孔子を招いた時に孔子は思うところがあつて会いに行こうとしたときに、弟子の子路が止めた話があります。孔子ほどの英雄(君主) なら兎も角、後の君主は、書生のように本を読む程度の類が多く、生きた学問をしておりません。そのため、かつての英雄とは比べ物にならず、君子と小人が争ひますと、大概はするがしい小人に善人である君主が負けることになります。これはおっしゃるとおりです。

(22) 人は用い方による

雲..

韓昌黎(かんしょうらい) 曰くにも、棺(かん)を蓋(おお) うて是非定まると申すが如く、人は生涯を畢(お) え申さねば、品格もつけられ申さず候。小事に拙(つたな) きも大事は成し得、大事は糊塗(こと) 候得ども小事は又敏なる者も之有(これあり)、何(いず) れ一方なる者にて、万

事兼ね申候はこれ無きことに候。騏驎(きき)、人をかむ勢ありて千里を走り、駑馬(どば)、千里の能なくしてしかも馴使(じゅんし) の徳候。故に、英雄は翼を戢(おさ) めて風雲の念を待ち申候。百里の小邦は龐足(ほうそく) を展(のぶ) るに足らず候。

(訳)

唐の文人韓昌黎(韓愈 768年824年) が詩の中で「棺(かん)を蓋(おお) うて、事乃(すなわ) ち了(おわ) る」と申しております。人は生涯を終えなければ品格もつけられないと申します。小事には失敗ばかりしていても、大事に成功する人がいます。またその逆で小事には敏であるが大事はうまくいかないという者もいます。その両方を兼ね備えた人はおりません。名馬は人を噛む勢いがあり、千里も走りますが、駑馬(どば) は千里を走る能力はありませんが、人に馴れて仕事をします。だから英雄は翼をたたんで、風雲の起るのを待っています。三国志にある「百里の大賢の路」の例をあげるまでもありません。

(コメント)

三国志にあるように、諸葛孔明に並ぶとも称された龐統(ほうとう) は、最初はさえない見た目から地方の長官に追いやられて遊んでいたが、それを見た張飛が怒ると、溜まっていた仕事をあつという間に片付けてしまったという。これほどの逸材がいたのかと張飛は驚き「百里は豈に大賢の路ならんや」(百里のような狭い地を治める官職は、優れた人物の就くべき役職ではない) といったという。

(水)

此の論確定易うべからず。

(訳)

この論は確定されたもので易(か)えることが出来ないものです。

(23) 媚びて悦ばせる

雲

人心を得申候工夫は、先ず初は何れにも下に媚びて悦ばしめ、悦んで後信じ申候節、寛嚴共に術中に有之候。一旦は忍ばざれば、事は得申すまじく候。子産の民に媚びよ。媚びて後信ずと申す語、殊のほか面白く候。

(訳)

人心を得る工夫として、まず始めは下(民)に媚びて悦ばせるてやれば、悦んだ後には信じて従うことでしよう。そうすれば寛容にするのも、厳格にするのも術中にある事になりましょう。一旦は耐え忍ばなければ、事は得られないと申します。子産(しさん)春秋時代の鄭(てい)の宰相)の言っている「民に媚びよ。媚びて後信ず」という言葉は殊のほか面白いと思います。

水

事に処し、物に接する、力を史学に仮らざるべからず。今試に之を論ぜん。子産公孫黒(こうそんこく)を刑し、子南の仇を報ずるの類の如き、多少の手段有り。時事を経歴する者に非ずんば其

の妙を解する能(あた)はず。夫(か)の書堆(しよたい)に泪没(こつぼつ)して空言闊論する者の若(ごと)き、理自ら理、事自ら事、判然(二)途たり、何ぞ能く之を為さん。

(訳)

事を行い、物に接するには、本当の意味での史学(歴史)に字ばねばなりません。今、この実例(子産の民に媚びよという意味)を論じてみましょう。子産(しさん)が公孫黒(こうそんこく)に刑を下し、子南の仇をとったという話の類は、少し複雑な手段があります。これはいろいろと経験して幅の有る人でなければこの内容(民に媚びよ)の妙を理解できないのです。本ばかりを読んで、空理空論をする者には、真実が見えず、根本の道理と表に現れた事象が判然としません。そのため仕事もよくできません。

(コメント)

中国春秋時代に、子産(しさん)は弱小だった鄭(てい)の国を安定した国にした名宰相といわれている人物ですが、この子産の一族である「子南」が妻を迎えようとした時、同属の公孫黒が男前であったのでその妻を横取りしてしまった。そして公孫黒は邪魔な子南を亡き者にしようとした。襲ったが逆に傷を負ってしまった。公孫黒はいろいろ手を廻して、今度は子南を国から追放してしました。しかし、子南はじつと時を待ち、横暴な公孫黒が同属の仲間から嫌われるのを待って、公孫黒を処罰してしましたのです。このように世の中をよく知っている、経験のある人はいろいろな方策があるということを理解することも必要なもので

よう。

ここでは、歴史書を読んで、その上辺を読んで理解しているだけでは真のことは理解できないといっています。

その歴史や背景などをよく理解して隠されている真意もよく調べる必要だと述べています。

(24) 賢臣を任ずる

雲

乱に臨むの君は各其臣を賢とすと申すは名言にて、天下の畏るべきことこの上なく候。賢と存候も姦邪に候。姦邪却つて賢人に候。いかにして識鑑仕や。君子善を為し、小人凶を為す、一徹の処に陥り申候。皆君の任ずる所より起き申候。任ぜざる時は、祖の害又甚だしく候。左様に事を案じ候ては、大事は出来申さず候。何れ我器量一杯に識鑑して委任する上は、不慮のことあらば共に斃れ申候心得より外はこれなく、祖上は了見の外に候。

(訳)

動乱に臨んだ君子はとかくその臣(部下)は賢明な人物と思うといいますが、これは実に恐ろしい事です。賢明な家臣と思っている者が姦邪(悪賢いもの)であったり、姦邪だといわれている者が逆に賢明な人物であることもあります。どのようになこれを見分けたらるしいでしょうか。一般に、君子は善いことを為し、小人は凶(悪い事)を為すと一律に決めてしまおうという先入観に陥りがちです。しかし、これも元をただせば、君子が任じ

た人物から起きるものです。とはいっても任じるのが危ないと思つて任じないと、その害が甚だしくなったりします。このように心配しては大事はできません。結局、自分の器量めいっばいに識鑑（見分け）して、人を任用する以外になく、もしそれで不慮のことが起こればともに斃れるという心得でいるよりほかに方法がありません。それから先は思いつくことではありません。

水..

賢主は其賢臣を賢とし、暗主は其不賢臣を賢とす。其賢を賢とすれば則ち政茲（ここ）に挙（あ）がり、若し夫れ之に反すれば、則ち国従つて亡ぶ。危いかな。

(訳)

賢明な君主は賢明な臣を使い、逆に暗い君主は賢明でない臣を賢明な臣として任用します。本当に賢明な者を用いれば、政（まつりごと）の成績は上がります。しかし、もし賢明でない臣を用いれば国は滅びます。とても危険なことです。

(コメント)

問いに対する答えとしては不満が残りそうですが、しかし、部下を用いるにはよくよく考えて賢者を任じることで、それも上に立つ（任命する）者の品格が優れていなければならぬということになります。今の政治に当てはめて考えると・・・うなつてしまします。

## (25) 善悪を分ける

雲..

善悪を明白に分け申候わば、季世には怨を得申候て、且つ事を敗（やぶ）り候。明白に分けざるときは賞罰の道行われ申さず候。何れの処に止（とど）め申すべきや、伺い候。

(訳)

善悪を明白に分けると、季世（末世）には悪から怨（うらみ）をかい、事を為せず敗れてしまふことがあります。しかし、明白に分けまさんと賞罰が行えません。どの程度にしておいたらよろしいのでしょうか。お伺いいたします。

水..

善を善とし、悪を悪とし、黒白分け明かすは公道なり。然（しか）れども亦（また）此れに因りて以て事を敗り、怨（うらみ）みを取ること有るなり。渾然含糊（こつぜんがんこ）は一時を濟（すく）ふに足るも、又遂（つい）に賞罰明らかならず、君子小人並び進むの弊（へい）あり。

(訳)

善い事は善い、悪いことは悪いと、黒白をはつきりとさせるのが公道です。しかし、この黒白はつきりさせたために失敗して怨みをかうことがあります。渾然含糊（こつぜんがんこ）態度や言葉があいまいでハッキリしないこと）にして、善悪をはつきりさせまさんと、一時はそれでよくても最後には賞罰がはつきり出来ずに、君子と小人の2つに割れて争いとなります。

## 水雲問答（26） 百万の甲兵に動ぜず

雲..

天下の大事を為る者は、百万の甲兵も我胸中に藪芥（たいかい）ともせぬ一氣象なくては参る間じく候。何れ大小の事、死生之を以てと申す勢なくば参るまじく候。衰世は人の存込甲斐なく存申候。危を見て逃れ申候工夫と概歎仕候。

(訳)

天下の大事を為そうとする者は、百万の甲（よろい）を藪（やぶ）芥（か）を着た兵士もその胸中に藪芥（たいかい）といふ小さなとげやとるにたらないゴミ）ともしない（物ともせぬ）ほどの意気軒昂（けんぱう）がなくてはいけません。いずれにしても大小の事は生死を度外視して当たるといふ勢いがなければなりません。衰世（乱世）でない今の世）はどうも人の事にあたる思いも甲斐がない（意気地がない）と思ひます。危険だと見てすぐに逃げようと工夫するのは、嘆かわしいことです。

水..

百万の甲兵有るに陣を列（つら）ねて前（す）むも、我れ之（の）意を動かすに足らず。而（しこう）して後を以て大事に当るべし。

(訳)

百万の甲兵が列をなして自分の方に向かってきて、我が意は動じないという気概があつて、はじめて大事に当らなければなりません。

(続)